

(トップページ: <http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/>)

(中東 VIP 劇場: <http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/VIPtheatre.html>)

(GCC の王家・首長家: <http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/RoyalFamilyInGcc.html>)

マイライブラリー:0243

(注)本稿は 2012 年 9 月 18 日から 10 月 22 日まで 5 回にわたり「アラビア半島定点観測」に掲載したレポートをまとめたものです。

2012.10.22

前田 高行

中東 VIP 劇場英国篇:ロイヤル・コネクションー英国王室と GCC 王家・首長家

目次	頁
1. プロローグ: アンドルー王子、欧州最高層のビルを降下	1
2. カタール: 英国を席卷するカタールの LNG とマネー	
(1)LNG 基地開所式に揃う両国元首	2
(2)ロンドンを席卷するカタール・マネー	3
3. ドバイ: ロンドン・エプソン競馬場の優雅な語らい	4
4. サウジアラビア: 砂漠のテントでアラブの自然を満喫するチャールズ皇太子	5
5. 英国王室の隠し玉「サンドハースト士官学校」	6
6. 王室外交は常に清く正しい?	6

1. プロローグ: アンドルー王子、欧州最高層のビルを降下



去る9月3日、英国エリザベス女王の次男アンドルー王子(52歳)がロンドンにある欧州最高層のビル「シャード」の外壁をザイルで降下する懸垂下降に挑んだ。王子はシャードの87階から約30分かけて235メートル下の20階に到達した。王子の挑戦は現役・退役軍人のための資金集めが目的で29万ポンドの寄付金が集まったとのことである。

「シャード」(英語で「ガラスの破片」の意)はロンドン・オリンピック開幕直前の7月に完成したばかりであるが、6月のエリザベス女王即位60周年記念式典で訪英したカタールのハマド首長夫妻が完成前の同ビルを視察し、また7月の落成式にはアンドルー王子とカタールのハマド首相が出席し

ている。実はシャードはカタールの政府系ファンド(SWF)が95%を出資して建設されたものなのである。

中東の小国カタールは今や世界最大のLNG輸出国として世界のエネルギー市場で大きな存在感を示すとともに、豊富なオイルマネー(ガスマネーというべきかもしれない)を駆使して積極的に欧州企業を買収し、或いはロンドンなど大都市で不動産投資を行っている。カタールのオイルマネーを管理するカタール投資庁(Qatar Investment Authority, 略称 QIA)はこのような企業や不動産への直接投資の他、西欧各国の国債を大量に保有しており、ロンドンのシティにある国際金融機関が資金運用に深く関与しているのである。これはカタールに限ったことではなく、UAE やクウェイトの政府系ファンド、サウジアラビアの中央銀行(SAMA)もシティと持ちつ持たれつの関係にある。

英国と湾岸産油国との関係は金融・経済面に留まらない。そもそもカタール、クウェイト、UAE は第二次大戦前までは英国の保護下にあり、1960年代から70年代にかけて首長国として独立した国々である。これらの国々の独立の陰で英国は外交・軍事・経済等で多大な支援を行っており、それ故に湾岸の君主制国家は英国に対して親近感を持っている。

彼らの親近感をさらに高めているのが英国の正式名称「連合王国 (United Kingdom)」(略称 UK) が示す通り形式的にせよ英国が「君主制国家」だということである。勿論民主主義に基づく英国の立憲君主制と湾岸各国の専制君主制とは性格が全く異なるが、湾岸各国の君主達は理屈抜きで英国王室に特別な親しみを感じている。彼らは選挙で選ばれたオバマ米大統領やオランド仏大統領よりも世襲制のエリザベス英国女王の方が断然親しみ易いのである。「英国王室」はなにものにも代えがたいトップ・ブランドである。

英国はこのように湾岸各国が英国に対して抱いている尊敬と憧れの感情を最大限に利用しており、王室自身もそのことを十分に意識して行動している。王室のメンバーはなによりも英国の国益を第一に考え、時としてあたかも民間経済大使のごとき振る舞いも辞さないのである。英国国民もそれをごく当たり前のことと見ている。

英国と湾岸諸国との関係を王室レベルのロイヤル・コネクションとして眺めると、そこには表向きの外交・政治・経済関係とは違った景色が見えてくる。

2. カタール: 英国を席卷するカタールの LNG とマネー



(1) LNG 基地開所式に揃う両国元首

2009年5月、英国ウェールズ州サウス・フックで欧州最大の LNG 基地の開所式が行われた。カタールのハマド首長がエリザベス女王と並んで施設を案内、首長の二番目の妻で皇太子の母親でもあるモーザ王妃が女王のすぐ後ろを歩いた(写真参照)。

LNG 基地はカタール石油、ExxonMobil 及び仏 Total 社 3 社の合併事業であり、QatarGas の 第四、第五 Train で生産される LNG の英国受入基地として建設されたものである。カタールはこのサウス・フック基地建設に合わせて、スエズ運河を通過できる最大級の LNG 運搬船 Q-Max も建造している。かつて北海油田全盛期の 1990 年代には石油を輸出し、原油とともに産出する天然ガスで国内需要を満たしていた英国は、油田の減退によりガスの生産量は毎年 10% 近く減少しており、今や天然ガスの輸入国になってしまったのである¹。

欧州はこれまでロシア、ノルウェーからパイプラインによって天然ガスを輸入しており、その他アルジェリアからも海底パイプライン或いは LNG を輸入しているが、ロシアへの過度の依存を解消し、供給源を多様化することが悲願であった。一方、世界最大規模の LNG 生産体制を整えたばかりのカタールは米国のシェールガス開発により北米への輸出の道を閉ざされ、新たな販路として欧州市場の開拓を狙った²。サウス・フック LNG 基地は欧州への本格的な進出を目指すカタールと、欧州 LNG 市場の覇者を狙う英国の思惑が一致したプロジェクトである。従って開所式に英国女王とカタール首長の両国元首が出席したのは当然のことだったと言えよう。

(2)ロンドンを席巻するカタール・マネー

環境に優しいエネルギーとして近年目覚ましい成長を遂げる天然ガスは福島原発事故を契機に更に脚光を浴びている。2000 年以降の天然ガスの貿易量の年平均増加率は 6.4% であり、2011 年にはついに 1 兆 m³ を超えている。中でも LNG 貿易の伸びが高く、過去 10 年で 2.4 倍、2010 年には対前年比 24% という驚異的な増加率を示している³。

この追い風を受けてカタールの財政は毎年莫大な黒字を生み続け、2011 年の LNG による歳入は 360 億ドル⁴、同年の予算黒字は前年比 3 倍増の 122 億ドルに達した⁵。この黒字額は一日平均に直すと約 26 億円となり、人口の少ないカタール国内だけではとても使いきれぬ金額ではない。余った資金はカタール投資庁 (QIA) とその関連企業を通じてヨーロッパなど海外に積極的に投資されることになる。英国はカタールの主要な投資国の一つである。

QIA に限らず湾岸諸国の政府系ファンドの投資姿勢は慎重かつ安定志向である。従って投資対象は間接投資なら西側大国の政府債・国債、直接投資なら優良な不動産か企業ということになる。カタールは英国ではまずロンドンの不動産に手をつけた。2007 年にチェルシー地区の国防省の兵舎跡地を 12 億ドルで購入したのを手始めに、シティと並ぶ金融センターとして開発に着手された Canary Wharf の開発事業にも参画した。2010 年には有名百貨店 Harrods をエジプト人実業家 Al-Fayed から手に入れている。因みに Al-Fayed の息子はダイアナ元妃と結婚、その直後パリの交通事故で二人共死亡した事件は有名である。そして先に触れた通りカタールは今やロンドンの目抜き通りに欧州最高層のビルを所有するまでになったのである。

株式投資分野で見るとカタールは英蘭系の国際石油企業 Shell の 3% 弱の株を保有し、最近その比率を 7% に増やすと表明している⁶。また世界の株式市場の雄ロンドン証券取引所についてもドバ

イに次ぐ第二位の株主であることは特筆すべきであろう。ロンドンっ子はカタールのオイル(ガス)マネーの威力を思い知らされているのである。

3. ドバイ:ロンドン・エプソン競馬場の優雅な語らい



写真は2010年6月、ロンドン郊外のエプソン競馬場で開催されたダービーでの一コマ。正面こちら向きがドバイ首長のムハンマド殿下であり、右横の華麗な淑女は彼の妻ハヤ王妃。王妃と歓談しているのは言わずと知れたエリザベス女王である。画面の左隅に夫君フィリップ殿下の姿も見える。イギリス王室とドバイ首長家の優雅な歓談風景である。

ムハンマド首長が浅黒い肌のベドウィン系アラブ人であるのに対し、妻のハヤ王妃は褐色で目鼻だちがはっきりしているのは彼女の母親がエジプト人だからである⁷。因みにハヤ王妃はアブダッラー現ヨルダン国王の異母妹である。彼女はムハンマドの二番目の妃として2004年に結婚した。王妃は女性も社会で活躍するヨルダンで育ち、スポーツも堪能なため嫁ぎ先のドバイではIOC委員を務めるなどファースト・レディとして活躍している。王妃がエリザベス女王と堂々と談笑しているのはそのような彼女の高貴な育ちと物おじしない性格によるものである。イスラムの戒律が厳しい湾岸諸国ではファースト・レディは滅多に公衆の面前に姿を現さず、まして夫と並んだ写真が公開されることは殆ど無い。その意味で彼女はカタールのモーザ王妃(前章参照)と共に素顔を晒す数少ないGCCのファースト・レディなのである。

ムハンマド・ドバイ首長は知る人ぞ知る競馬好きであり、世界的な競走馬のオーナー(馬主)或いはトップ・ブリーダー(生産者)として有名である。彼と彼の兄弟は「ゴドルフィン・グループ」の名のもとに世界各国に牧場を所有している⁸。一方の英国王室も馬をこよなく愛し、17世紀に当時のアン女王がウィンザー城の近くにはアスコット競馬場を作らせたほどである。チャールズ皇太子も乗馬が得意でポロ好きとして知られている。

ムハンマドは英王室のひそみにならい、2010年ドバイにメイダン競馬場を眼玉とする超豪華なリゾート施設を建設した。競馬場は1周2,400メートル、スタンドの長さ1マイル、収容人員6万人、その他にもホテルや国際会議場を備えた世界最高級のリゾート施設である。メイダン競馬場では毎年3月ドバイ・ワールド・カップが開催されるが、これは賞金総額1千万ドル(1着賞金6百万ドル)の世界一のビッグレースであり、日本を含め世界から優駿が勢揃いする。因みに昨年のレースでヴィクトワールピサが日本勢初の優勝を果たしている。冒頭のダービー当日の記事によれば、エリザベス女王はムハンマド首長にドバイ・メイダン競馬場完成のお祝いを述べたと言われる⁹。

4. サウジアラビア:砂漠のテントでアラブの自然を満喫するチャールズ皇太子



2006年3月、チャールズ皇太子とカミラ夫人がサウジアラビアの首都リヤドを訪問した。

リヤドはアラビア半島のほぼ中央部にあり、郊外には広大なネフド砂漠が広がっている。「砂漠」と言っても日本人が想像するような草一つ植えない砂丘ではない。低い灌木がまばらに茂り、春先の2～3月にはアイ

リス(あやめ)や名もない野草が色とりどりの可憐な花を咲かせる。リヤドの3月は1年で最も気候の良い時期であり砂漠は格好の家族レクリエーションの場となる。週末になると伝統的なベドウィン様式のテントが無数に張られ家族や友人たちとアラビア・コーヒーを飲みながらおしゃべりに興じ、子供たちはテントの周りを走り回る。

自然を愛する英皇太子は砂漠がお気に入りのようであり、独身時代は頻繁に訪問、アブダラー国王と砂漠で鷹狩に興じている。国王は英国王室を深く敬愛しており英国とサウジアラビアは他の国では見られない特別な関係を保っている。皇太子による王室外交は通常的外交に優る効用を持っているのである。

チャールズ皇太子はダイアナ妃と結婚したあとも何度かサウジアラビアを訪問しているが、ダイアナ妃は同行していない。都市やファッションが好みのダイアナは皇太子と異なりアラブ世界とその自然には興味がなかったようである。もっともチャールズ皇太子自身はリベラルな発言と行動で知られ、女性の権利を制限する古色蒼然たる絶対君主制のサウジアラビアをどのように思っているかは問題がありそうだ。

しかしサウド王家は英国も自国も共に国名に「王国(Kingdom)」の名を冠していることに強い親近感を抱いている。因みに英国の正式国名は United Kingdom であり、サウジアラビアのそれは Kingdom of Saudi Arabia である。些細なことに見えるが、特権階級(エスタブリッシュメント)はこのようなことを案外重視するものである。王室同士の付き合い(王室外交)は相手の自尊心をくすぐり仲間意識を持たせるための重要な外交手段と言える。

チャールズ皇太子とカミラ夫人は翌2007年にはUAE、クウェイト及びカタールも歴訪している。これらの国々はいずれも絶対君主制国家であるが、1960年から70年にかけて独立するまでは実質的に英国の支配下にあった国々である。当時の英国支配は概して大らかであり、列強によるアフリカの帝国主義支配のような苛斂誅求を極めることはなかった。そのため彼らは英国に対して憎しみよりも親しみを感じており、各国の首長たちはチャールズ皇太子夫妻を熱烈に歓迎した。英国の王室は自己のブランド価値を活かし、これら湾岸の国々に対してしたたかな王室外交を展開している

のである。

5. 英国王室の隠し玉「サンドハースト士官学校」¹⁰



ロンドン郊外サンドハーストに The Royal Military Academy Sandhurst (RMAS, 邦名「サンドハースト陸軍士官学校」と呼ばれる英国陸軍の高級将校養成機関がある。チャールズ皇太子の二人の息子ウィリアム王子とハリー王子も RMAS で軍隊教育を受けた由緒ある学校である。

実はこの学校には UAE、カタール、バハレーン等湾岸諸国の王家・首長家から多数の王子が留学している。例えばハマド・カタール首長の長男ジャーシム王子(前皇太子)は 1996 年に RMAS を卒業している。またムハンマド・ドバイ首長(UAE 副大統領兼首相)の 3 男マエド王子とハマド・バハレーン国王の息子ナーセル王子(現南部州知事)は同じ 2006 年に卒業しており、卒業式には二人の父親が共に列席している¹¹。

湾岸各国の君主は幼い王子達のために英国から家庭教師を呼び寄せて王宮内で帝王学を学ばせ、成人すると RMAS に留学させるのである。その目的は二つある。一つは英国流のマナーを身につけ帝王学の総仕上げを行うこと。そしてもう一つの目的は将来の他国の国王或いは元首との人間関係を築くためである。その意味で RMAS はこれまでに取り上げたエリザベス女王やチャールズ皇太子による表の王室外交に対する裏の隠し玉である。中東各国の若い王子たちが士官学校で「仲間と同じ釜の飯を食う」ということは王室同士の絆を深めるまたとない機会である。と同時にこの経験により GCC の王子達が英国に親近感を持つようになるのは当然の帰結とも言えよう。

6. 王室外交は常に清く正しい？

英国王室と GCC の王家・首長家の間には長い歴史的関係があり、今も盛んに王室外交を展開している。現代の王室外交は親善と友好が目的である。エリザベス女王がカタール首長夫妻と LNG 基地の完成式に臨席したり、或いはエプソン競馬場でムハンマド・ドバイ首長夫妻と談笑する時に政治や経済の生臭い話をするとはいえない。またチャールズ皇太子もリヤドの砂漠でアブダラー国王と鷹狩りに興じる時に中東情勢について突っ込んだ話をしている訳ではないだろう(簡単な意見交換くらいはやっているかもしれないが-----)。

但し彼らの背後に政治家や実業家の影が見え隠れすることもある。例えば 2006 年にチャールズ皇太子夫妻がサウジアラビアを訪問した当時、英仏両国はサウジアラビアの次期戦闘機の商談を巡って激しい受注競争を繰り広げていた。フランス側は当時のシラク大統領が直々にリヤドに乗り込んだが、結局サウジアラビアは英国に発注したのである。同時期のチャールズ皇太子の訪問が

偶然の一致だったとはとても考えられないのである。

英国の立憲君主制と湾岸諸国の絶対君主制は似て非なるものとは言え、英国王室と GCC の王家・首長家は共に世襲制であり、そのことでお互いが親近感を持つであろうことは容易に想像がつく。これはフランスや米国のように数年間で国家元首が替わる大統領制ではとても太刀打ちできない。君主制は(日本の天皇制もそうであるが)何物にも代え難いブランドなのである。

(完)

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行 〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601
Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642
E-mail; maeda1@jcom.home.ne.jp

¹ 拙稿「BP エネルギー統計レポート 2012 年版解説シリーズ：天然ガス貿易篇」参照。

<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/0238BpGasTrade2012.pdf>

² 拙稿「シェールガス、カタールを走らす」参照。

<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/0148ShaleGasQatar.pdf>

³ 上記「BP エネルギー統計レポート 2012 年版解説シリーズ：天然ガス貿易篇」参照。

⁴ Gulf Times on 2012/8/18, 'Qatar top property investor in Europe'

http://www.gulf-times.com/site/topics/article.asp?cu_no=2&item_no=525932&version=1&template_id=57&parent_id=56

⁵ Khaleej Times on 2012/7/10, 'Qatar surplus triples to \$12b'

http://www.khaleejtimes.com/biz/inside.asp?xfile=/data/internationalbusiness/2012/July/internationalbusiness_July39.xml§ion=internationalbusiness

⁶ Gulf Times on 2012/9/8, 'Qatar fund looks to raise stake in Shell'

http://www.gulf-times.com/site/topics/article.asp?cu_no=2&item_no=529941&version=1&template_id=57&parent_id=56

⁷ 王家の構図—MENA の王家シリーズ・ヨルダン篇「ヨルダン・ハシミテ家の構図」参照

<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/S01JordanHashmite.pdf>

⁸ GCC 諸国の王家・首長家 ドバイ・マクトゥーム家」参照

<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/0101RulingHouseInGccDubai.pdf>

⁹ Khaleej Times on 2010.6.6, 'Shaikh Mohammed meets Queen Elizabeth'

http://www.khaleejtimes.com/DisplayArticle09.asp?xfile=data/theuae/2010/June/theuae_June155.xml§ion=theuae

¹⁰ 拙稿「もう一つの中東王室外交—英国サンドハースト陸軍士官学校」参照。

<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/S2006RoyalFamilyUk&Gcc.pdf>

¹¹ Khaleej Times & Gulf Daily News on 2006.8.13,

http://www.khaleejtimes.com/DisplayArticleNew.asp?xfile=data/theuae/2006/August/theuae_August345.xml§ion=theuae&col=及び

<http://www.gulf-daily-news.com/Story.asp?Article=152384&Sn=BNEW&IssueID=29146>